

【ねがいましては】

令和6年3月16日

KYOWA SCHOOL

第406号

「期待されると」

ある日の新聞です。「ワリエラに56種薬物」・・・えっ！ イギリスBBC（英国放送協会）からの発表です。ロシアのフィギュアスケート女子、カミラ・ワリエラさんが13～15歳の頃に約2年間、ロシアの研究機関から56種の薬物サプリメントを与えられていたという内容です。世界反ドーピング機関（WADA）が禁止する薬物には該当しなかつたそうです。しかし56種の薬物を2年間ワリエラさんが飲んでいたという事実に私は唖然としました。

ロシア国家の期待の星に課せられたもの・・・目的はおそらくオリンピックでしょう。その目標に向かって彼女は自らそのサプリメントを希望したのでしょうか。それとも半強制的に投与されたのでしょうか。

勝つための手段・・・。

その彼女の姿を、そのまま今の日本の子どもたちに重ねてみました。つい先日、某放送局で取り上げていた番組ですが、「教育虐待」ということばを使い特集していました。勉強の強制、テスト結果からの罵倒、そこから発生する体罰などがそれにあたり、その影響から、子は精神疾患等を発病してしまうことがあるそうです。

親は「おいしいよ、たべてごらん」「つよくなれるよ（頭が良くなるよ）」「良いせいせきがとれるよ」などなど、盛んに子のためを思ってのことなのでしょうが、巧みに言葉を投げかけます。さあ次です。そのことばの中には、ある親の思いが強く溶け込んでいます。「期待」です。「合格してくれればいいなあ」「成績が上がってくれればいいなあ」さまざまな「サプリメント」に酷似した内容を掲げ、子に接していくます。

植物に例えれば、人体に影響のないギリギリの栄養素とでも言うのでしょうか。しかし、その与え方や、与える量の問題、何か副作用でもあった場合には、どのような対処を講ずるべきか・・・。与え方を間違えれば、その植物は枯れてしまうかもしれません。

子にどのように接していくべきなのか。

ここで慶應大学教授である今井むつみ教授（認知科学・言語心理学・発達心理学専攻）の言です。「子どもは世界を探索しながら、経験を通して知識を蓄積しています。ところが学校に入ると、学びとは教室で座って先生の話を聞くこと、テストで効率よくいい点をとることとされてしまいます。」（PHPNo.911より）

赤ちゃんは、机に座り、真の前に先生がいて、ことばを教えてくれるという学習はしません。自ら動き様々なものを手にし、自らそれを分析、判断という過程を繰り返しながら成長していきます。「バーバ、ジージ」と、発するとおばあちゃんやおじいちゃんが反応してくれる。だからこの人は「バーバ、ジージだ」。

あれだけ転んでばかりいたのが、ある日突然けっこう長く歩いてしまう。周りの者もうれしいのですが、最もうれしいのは赤ちゃんご本人。それが「真の学び」・・・。そのまま様々なことができるようになることが成長への喜びとなっていました。「できる」前に必ずと言ってよいほど経験するのが「失敗」です。誰にも言われなくとも、成功のうらには必ず失敗の存在がある・・・言葉ではなく感覚で学習します。つまり体得です。勉強も同じです。

そのままの状態で学校へ行ったとしたら、きっと「勉強は楽しいね！」になるのかもしれません。しかし落とし穴がありました。それが今井教授の言われる「テストで効率の良い点をとることが真の学びなのだ」と感じるようになっていくことで、やがて失敗（悪い点）は悪者へと変化していきます。

学びの基本は「自分自身が日々変わっていくことが楽しい」と感じることなのだと思います。私も100%同感です。その主義主張を抱きながら45年間、この小さな学び舎で歩んできました。これからも変わることはありません。

教授は「モチベーションを上げるための報酬」として、入試合格などにも危険が潜んでいると言います。合格したとたんに自分を失ってしまう人がいるそうです。

ご家庭での対応にも子のモチベーションアップにつながるヒントがあるそうです。子が訪ねてきます。「おかあさん、これ何？」「・・・それは先生に教えてもらいなさい」これがかなり危険な受け答えになるそうです。知識は学校の先生から教わるものなのだと思いつめになってしまふことで、その後は母に「質問する」ことはなくなってしまう危険です。そこで正解です。「おかあさん、これ何？」「・・・うーん、おかあさんにもわからないわ。じゃ一緒に調べてみましょう。」これが大正解。子は、学びは学校だけではない、24時間どこでもできるものなのだ。つまり、生きているときはぜーんぶ勉強だ！ テストだけが勉強じゃないぞ、身の回りのすべてが勉強だー！

子は好奇心のかたまりです。「いっしょにしらべましょ！」がきっかけになり、「自らどんどん学ぶ姿勢」が生まれたわけです。

ワリエラさんのようなかわいそうな人生を経験させないためにも、「過度な期待」をせず、子の「修正力を高める取り組み」が大切なのだと思います。「修正力」つまり間違えたとき「ボクはもうだめだ」ではなく、「失敗はたいせつなものなのよ、よかったです」など、笑顔でお子さんを迎えてあげましょう。大切なことは、子どもが失敗しないようにとお膳立てをしそうないことです。あのサプリメントは失敗させないための56種だったんですね。